若　者

春に想う

田　代　孝　二*

春――野山が活気を取り戻し，ビルの谷間に陽炎がたちのぼる．華やかさの中に，何となく全体がボッと霞んだような気配がする．

あはれ　花びらながれ
をみなごに　花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ
うららかの跫音（あしおと）　空にながれ
をりふしに瞳をあげて
翳（かげ）りなきみ寺の春をすぎゆくなり
み寺の甍（いらか）　みどりにうるほひ
廂（ひさし）々に
風鐸のすがたしづかなれば
ひとりなる
わが身の影をあゆまする甃（いし）のうへ

私の好きな，三好達治の詩「甃のうへ」である（詩集「測量船」）．乙女達の華やいだ姿．雪のように降りゆく淡紅色の花びら．み寺の静かなたたづまい．達治が，何処の寺を背景にこの詩を詠んだのか，不学の私にはわからない．しかし，私にとっては，この寺は，京ではなく，奈良―中でも西の京でなくてはならない．西の京といえば，真先に思い浮かぶのは薬師寺であろう．大池を隔てて遠望する薬師寺の塔影は夢幻のたたづまいである．6年程前，春4月，薬師寺の西塔が再建され，落慶法要が催された．私も仕事をサボタージュし，見物に出かけた．普段は広い境内も人で溢れている．金堂をはさんで東西に三重塔がそびえている．千年以上の歳月を経て，静かに，見る人をその美しさで圧倒しつづける東塔．屋根の反り具合も威風堂々，相輪を大空に貫き通さんばかりの若々しい西塔．読経の声が寺全体を覆う．舞楽伎楽が奉納され，笙篳篥（しょうひちりき）の音が流れる．空からは蓮華が降りそそぐ．まさに天平時代が目のあたりに再現された思いである．しばらくの間，無我の境地で佇立していた．やがて，私の足は，隣りの唐招提寺に向いていた．

その日，薬師寺の賑いとは対照的に，唐招提寺を訪れる人は数える程であった．南大門を入り，両側の植込みを抜けて金堂が目に飛び込む．何千枚もの瓦を敷き並べ翼を拡げたような大きな屋根．それを支える何本もの太い円柱（まるばしら）．どっしりした中に，大棟の曲線のかもしだす美しさ．女性的な薬師寺とは一種異った趣である．金堂を通りすぎ，いつしか森閑とした場所に出ていた．木々に囲まれて，唐招提寺開祖であられる鑑真和上の墓が祀られている．夕闇が迫ってきた．囲りには私一人しかいない．和上の墓に長い間向いながら，次第に井上靖の小説「天平の甍」が思い出されてくる....

よく知られているように，この小説は，本朝古代文化史上に重要な意味をもつ唐の名僧鑑真の渡日，そしてその裏で奔走した数人の青年留学僧の運命を描き出した物語である．20年程前に和上の1200年忌紀年行事が日中両国で催され，また6年程前に映画が作られたことを記憶されておられる方も多いであろう．あらすじを私流に紹介してみようと思う．

およそ1300年前，天平時代．平城遷都により，奈良に一大都市が生まれ，興福寺，大安寺など数多くの寺が建立された．しかし，この壮大な伽藍には空疎なものが漂い，経典も少ない．酷税，旱魃，飢饉などで都の周辺には，おびただしい流民がたむろしていた．彼らは，朝廷からの税取り立てを免れるために，争って出家し，流亡していた．僧の数は著しく増え，畢境，そ

*田代　孝二（Kohji TASHIRO），大阪大学理学部，高分子学科，助手，理学博士，高分子物理化学

の行儀は甚しく堕落した．僧として守るべき規範は何一つ定まっておらず，仏徒は自誓受戒にとどまるのが大半であった．つまり，決して仏の道にそむくことはしませんと，自分に誓うわけである．人間は弱い．戒を破るのはアッと言う間である．仏教界を浄化するには，唐から秀れた戒師を迎え，正式の授戒制度を布く以外に方法はない．釈迦仏の至上命令として戒めを授けなければ効果はないわけである．（旧約聖書で，モーゼが神から十戒を授かるのも同じ内容であろう．）そこで何人かの僧を渡唐させることになった．選ばれたのは，普照ら，30代の青年僧達であった．彼らは燃えた．「我々の使命は，少なくとも生命を賭けるだけの価値はある！」

こうして，この青年達は，何年先に帰朝できるか見当もつかない重大任務を負って旅立った．今日からするとオモチャとも見える小さな船で，東シナ海の荒波を突っ切って，唐へと出航していったのである．唐土を踏んで約10年間，彼らは写経をし，学問に没頭し，伝戒の師を捜し求めた．そして，あるきっかけから揚州大明寺の高僧鑑真に出会うことになる．「骨格は太く，額広く，眼も鼻も口も大きく確りと坐り，頂骨秀で，顎は意志的に張っていた．…」井上靖は和上をこう描いている．留学僧から適当な伝戒師の推薦を依頼された鑑真は，居並ぶ大勢の弟子僧に問う――「この一座の者の中でたれか日本国に渡って戒法を伝える者はないか．」和上は２度繰返した．一座は水を打ったごとく，しんとしている．鑑真は三度（みたび）口を開いた．「法のためである．たとえびょうまんたる滄海が隔てようと生命を惜しむべきではあるまい．お前たちが行かないなら私が行くことにしよう．」時に鑑真55歳．こうして和上達の苦難が始まる．唐の政府が高僧の海外渡航を容易く許すはずはない．秘密裏の出航，海難，捕縛を繰返すこと，実に10年余．鑑真はついに失明までしてしまう．留学僧も，ある者は放浪の旅に出，ある者は病死し，残っているのは普照唯一人であった．それでも和上は渡日の意志を捨てない．艱難辛苦の末，鑑真の一行が奈良の都に到着したのは天平勝宝６年（754年），普照らが難波の津を出発してから20年後のことであった．かくして，和上の手によって，天皇を初めとし，僧徒ことごとくが戒を受け，ここに日本で初めて授戒伝律が成るわけである．和上の住まわれた唐招提寺は天平宝字３年（759年）に建立され，仏教学問の中心寺となった．四方から大勢の出家学徒が集まり，律を学び，戒を受けた．この寺を訪れると，竹林に囲まれて御影石の戒壇が見える．幾人の僧侶がこの石を踏みしめたのであろうか．金堂の屋根には，今も，天平時代の息吹を伝えるかのように鴟尾（しび）が光り，風鐸が静かに下がっている．

私は高分子科学を志す一介の若手研究者にすぎない．私が，恩師田所宏行（大阪大学名誉教授），小林雅通（大阪大学教授）両先生に導かれて高分子の世界に踏み込んだのは，約15年前．果して，青年僧普照のように目を輝かせていたであろうか．当時，田所研究室では，高分子結晶の立体構造を分子，原子レベルで解析し，分子間に働く相互作用を明らかにすることを中心テーマとしていた．一体どれがポリエチレンで，どれがポリプロピレンなのか，嘴の黄色い私は，そんなことも区別できない全くの未熟者であった．いろいろの教科書，論文を学習する中で，ある時，一つの文章に出会う．それは，田所先生が高分子結晶構造の解析法を入門者の為にわかり易く書き下された解説書で，最後のしめくくりに，このような事が書かれてあった．「…こうして明らかになった構造を基に，高分子のもつ物性を予想すること，これが我々の夢である．…」私が，この道に進み出した動機の１つは，ここにある．高分子物質の持つ性質と構造の関係を，真の意味で，分子レベルから明らかにすることができれば――　しかし，高分子はあまりにも複雑である．結晶部分あり，非晶部分あり，折れたたみあり，云々．夢と現実の隔たりは，私にとって，想像もつかないぐらいに大きく，そして深い．鑑真和上が，そして，普照が，生命を賭けて飛び込んでいった大海原．高分子という茫漠たる大洋．木の葉のように荒波に翻弄される私．しかし，謎と魅力に満ち満ちた高分子科学の世界……

春霞みの中で，ふと，こんなことを想ったりした．